

島津久基著
沼澤龍雄著
龜田純一郎著
平林治德著

源氏物語總釋 第一

樂浪書院刊

昭和十三年二月十日印刷

源氏物語總釋 第一卷

昭和十三年二月十五日發行

頒價 二圓

著者代表 沼澤龍雄

東京市中西區江古田一ノ二〇五四

發行者 篠田太郎

東京市牛込區早稻田郵便町一〇七

印刷者 吉原良三

行印社交康社會式株
本製堂快三

發行所

東京市中西區
江古田一丁目
二〇五四番地

樂浪書院

電話四谷一〇八〇番
振替東京八〇〇四七番

凡 例

一、本書は源氏物語の普及を目的としたるが故に煩瑣な考證、校訂を避け、全篇を平易なる口語に譯し、簡單なる註釋を施すにとどめた。

二、原文は一般知識階級を目標とする本書の立場から青表紙本湖月抄を用ひたが、各執筆者の獨自な意見を尊重し多少の校訂を加へるに任せた。

三、題簽は工藤壯平氏、装幀は野口明氏を煩はした。兩氏の厚意に深謝する次第である。

源氏物語概説

島
津
久
基

一 名 稱

源氏物語、正しくは「源氏の物語」、或はもつと詳しくは「光源氏の物語」といふのがその題名である。「光源氏物語」の題號は言ふまでもなく主人公光源氏から來てゐる。又この物語を一名「紫の物語」とも呼んだ由が更級日記に見えるのも、同じく女主人公紫上の名に因由するからである。が、既に作者紫式部自身の日記中に「源氏の物語」と見えてゐるからやはり「源氏物語」と呼んで差支なく、且その方が正當であらう。（この「の」字は省略する通行の讀みで十分であらう）さすれば、その後篇ともいふべき光源氏の後繼者達を主人公とする宇治十帖も亦、無論この名稱の中に頗る自然な形で含まれ得ることになるわけである。

二 作 者

紫式部。一條天皇の中宮上東門院の女房。越後守藤原爲時の女として生れた彼女は、學者で詩人である父の血を受けて幼時から學問を好み、兄が父から史記を習ふ傍らに居て、兄よりも物覚えがよかつた事や、長じて上東門院に仕へて白氏文集の樂府を御教へしたりした事が、自分の日

記にも記されて、學才には恵まれてゐたが、その家庭生活には不幸で、右衛門權佐兼山城守藤原宣孝に嫁して、大貳三位・辨局の二女を擧げた（二女が同一人で式部の女は一人だつたらしいといふ説もある）けれど、結婚生活僅々三年にして長保三年二十四五歳で夫に死別し、寡居を淋しく遺兒の養育に慰めつゝ暮して居たが、寛弘三四年頃御堂關白道長の御女中宮彰子（後の上東院）に仕へてその學才を愛でられた。源氏物語の犬著に筆を染めたのは恐らくその寡居時代からで、官仕に上つた後、寛弘五年十一月には藤原公任卿からこの作者が「若紫」の渾名で呼ばれてゐるから、その頃少くとも若紫卷までは出來てゐて、以後ずつと書き續けたものであらう。

紫式部の式部といふ呼名は、兄惟規（のむねのり）の官名式部丞に因んで附けられた名と普通には云はれてゐるが、兄惟規の官位年歴に照合してみると、妹が官仕に上つた當時は惟規はまだ兵部丞で、式部丞に任じたのは寛弘五年七月以後の事に屬する。だから紫女の式部といふ召名は寧ろ父爲時の舊官名に因つて附けられたのではあるまいかと思はれる。爲時は若い折に式部丞にも式部大丞にもなつたことがあるからである。又紫式部の紫の稱呼の原據に就いても諸説あるが、「榮華物語」には藤式部と見えてゐるから、初めは他の官女等の場合と同じく藤原の姓に因つて呼ばれたのであらうし、源氏物語を書くに及んで、その女主人公紫上に因んで、且は藤の色の聯想からも紫式部

と呼ばれるやうになつたと推定するのが最も穩當であらう。

又一説として源氏物語は、父爲時の構案に成るとか、紫式部の草稿に御堂關白道長が筆を加へたとか、宇治十帖は式部の女の大貳三位が書き繼いだなどいふ説もあるが、同じ作者の紫式部日記の文章や手際に併せ鑑み、又更級日記の著者が治安元年頃に宇治十帖までを讀んだことの確證があるし、殊に纖細錯綜した女性の心境的表现といふ點から特に、やはり最後まで式部一人の手に成つたものと見たいのである。

三年 代

藤氏全盛の一條天皇の御代、文化の進展と文運の隆盛に伴つて、數多の女流作家が輩出し、皇后宮定子の方には清少納言を初め馬内侍等が仕へ、これに對して上東門院の方には紫式部の他にも赤染衛門・和泉式部・伊勢大輔・小式部内侍等の閨秀が仕へて、互に研と才とを競つてゐた時代である。即ち寛弘三四年前後に紫式部は大作源氏物語の筆を起したとみれば、丁度皇紀一六六〇年頃（西曆一〇〇〇年）頃で、今から約九百年前にこの世界的大作が完成された事になるのである。歐洲に於て、寫實小説の祖と言はれる伊太利のボツカチオの「十日物語」(デカメロン)は、

源氏物語に後れる事約三百年、その他支那の長篇小説水滸傳も約二百年以上の隔りがあり、この點から言つても、源氏物語は世界最古の、而して最大の長篇小説としての正しい位置を、世界文藝史上に當然主張すべきものである。

四 來 由

源氏物語は紫式部が結婚生活三年にして夫宣孝に死別した後、遺兒を育てつゝ寡居の孤獨のつれづれに書いたとするのと、上東門院に仕へて後、宮中生活に於ける色々の體驗を基として筆を染め初めたとするのと兩説行はれてゐるが、寡居時代の僅か數年であの大部作が完成されたと見るのは少し無理ではないかと思ふ。やはり前にも述べたやうに、寡居時代に筆を執り初め、そして宮仕後半年代の後には既に若紫卷まで書き上り、順次筆を繼いだものとみるのが穩當であらう。又別に傳説として宮仕後大齋院（村上天皇第十皇女選子内親王）から珍しい物語を覽たいとの御懇望があつた爲、上東門院の下命によつて源氏物語を書く事になり、祈願の爲に紫式部は江州石山寺に參籠し、折節湖水に映る八月十五夜の満月の光を眺めながら、ふと浮んだ構想を、そのまゝ筆を執つて机上の大般若經の裏面に書いたのが須磨・明石の卷で、この二卷が先に出來て

後、前々の卷を書いたのであるといふ逸話が有名で、石山寺には紫式部が源氏物語を認めたといふ源氏の間といふのさへ現存してゐ、北村季吟著の源氏物語の註釋書「湖月抄」の題號もこの傳説から出たものである。

五 卷 數

源氏物語五十四帖と普通に呼ばれてゐる。即ち、光源氏を中心とした正篇とも言ふべき部分の四十四帖と、それに續篇の觀をなす薫と匂宮を中心とした所謂宇治十帖とである。但しこれは卷名のみあつて本文の無い雲隱卷を一巻と目し、若菜上下を又一巻と見るか、さなくば雲隱を認めずに、代りに若菜を上下二巻としての數へ方である。この他に六十帖説、三十七帖説等があり、前者は天台の六十卷に倣つて五十四帖を漠然六十帖と言ふのと、事實六十卷あつたのが缺けて現在の五十四帖になつたといふのと兩説あり、雲隱・巢守・櫻人・法の師・ひばりこ・やつはし、或は櫻人・巢守・さしぐし・八橋・嵯峨野上下の補卷すら現れてゐるが、何れも後世の僞作で、何等根據なき想像説に過ぎない。この六十帖説に關聯して源氏の卷數問題に深い交渉を有するのと言ふまでもなく雲隱卷の存否論である。近來は否定説が擡頭して來たが、既に平安末頃から卷

名のみの巻と傳へられてゐるのであるから、一概に名實共に否定する事は出来ない。後者つまり三十七帖説は、並びの巻と稱して巻名は別けてあつても内容の連續してゐる巻々を一巻として數へた時の計算で、結局五十四帖説と同じである。又更級日記に五十よ巻とあるのは、恐らくやはり五十四帖の意で、源氏全巻——少くとも殆ど大部分——完成してゐたと觀てもよいであらう。

六 卷 名

首卷桐壺から尾卷夢浮橋まで五十四帖の巻名を挙げれば、

桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・花宴・葵・賢木・花散里・須磨・明石・
澤標・蓬生・關屋・繪合・松風・薄雲・槿・少女・玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野
分・行幸・藤袴・眞木柱・梅枝・藤裏葉・若菜(上下)・柏木・横笛・鈴蟲・夕霧・御法・幻・
〔雲隱〕・匂宮・紅梅・竹河・橋姬・椎本・總角・早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢
浮橋

である。この巻名の原據は、各々の巻中の詞句から出たものと、歌から出たものと、或は兩者から出たもの、又はその巻の主人公に因んだもの、その巻の主要事件によつて附したもの等の場合

がある。二三の例を擧げて見れば、

女主人公桐壺更衣に因んだ桐壺卷

「帚木の心を知らで園原の道にあやなくまどひぬるかな」の歌から出た帚木卷

主要事件によつた紅葉賀卷・花宴卷等

それから雲隱卷を數に入れるべきか如何かに關して説のあることは前章に述べた通りである。

七 諸 本

源氏物語の本文には普通に知られてゐるものでは青表紙本と河内本とがある。現在湖月抄等の姿で行はれてゐるのが青表紙系の本文であるが、この青表紙といふのは藤原定家の校勘本で、中世以降一般の流布本として行はれてゐるものである。河内本はやはり定家と略同時代の河内守源光行・親行父子が源氏物語の諸本八つを以て校合したもので（青表紙もその八本の一である）、室町期以前までは専らこれが行はれた。（河海抄・花鳥餘情等の古い註釋書は河内本を用ゐてゐる。）然るに中世に至り歌道に於て定家の後裔たる二條家の學統の勢力が壓倒的となると共に、必然青表紙が行はれ、河内本その他の異本は影を潜めて現在に至つてゐるが、大正になつて河内

本の善本が発見されて、再び世に知られるやうになつて來、殊に近時紹介された尾州家本は河内本の現存最古の完本として貴重なものである。

青表紙本と河内本と本文の異同を對校すると、互に一長一短あり、河内本を以て流布本を補正し得る箇所も尠くないが、概しては河内本の方が文辭が増大してゐる傾向があり、冗漫の嫌ある場合すらある。全體としては意味上の大きな差異は餘り多くはない。そして文學的表現としては猶青表紙の方に寧ろ左袒し得られる。

なほ源氏物語の異本には、從一位麗子本や河内本系の耕雲本等もある。

八 註釋書その他

註釋書の始祖と言はれるのは、平安末の世尊寺伊行の源氏物語釋、それから伊行の釋に定家が追補した源氏物語奥入であるが、これらは未だ引歌引詩故事典故單語等の拔書程度に止まつて居り、次いで水原抄・紫明抄等を経て源氏大部註釋書の始祖河海抄（二十卷、四辻善成著）が出て一紀元を劃した。その後の主なものでは、花鳥餘情（三十卷、一條兼良著）か先づ注目せられねばならない。それから弄花抄や細流抄その他種々のものが出たか、それ等諸註釋書の總決算總集成

ともいふべきが岷江入楚（五十五卷、中院通勝著）と湖月抄（六十卷、北村季吟著）である。特に後者は世俗的に最も有名である。以上が即ち舊註と呼ばれる部の主なもので、これに對して新註は、所謂元祿の文藝復興期以降、國學者の自由討究の結果に成つた契沖の源註拾遺（八卷）、賀茂真淵の源氏物語新釋（五十四卷）、本居宣長の源氏物語玉の小櫛（九卷）、萩原廣道の源氏物語評釋（十三卷）その他がそれである。就中文藝論としての玉の小櫛、鑑賞批評的註釋としての評釋が最も勝れてゐる。

明治以後も多くの註釋書が出た中で、新源氏物語（藤井・沼波・佐々・笹川四氏合著）が出色のものであり、その他新しくは青表紙を底本とし、河内本を以て校訂した金子元臣氏の定本源氏物語新解、拙著對譯源氏物語講話等がある。梗概書にも種々あり、最も有名なのは源氏物語忍草（五卷、季吟の子湖春著）で、近時のものとしては梗概程度以上に原文の譯出を加味した與謝野晶子氏の新譯源氏物語があり、又物語日本文學の叢書中に拙著源氏物語（上下）がある。紫女傳の研究で古來名高いのは安藤爲章の紫家七論（又は紫女七論）、年立系圖の書で有名なのは源氏物語すみれ草（北村久備著）である。源語關係書目一覽としては、源氏物語研究書目要覽（藤田徳太郎氏著）が精細である。

後世源氏物語の文に倣つて原典に補足を試みようとした創作に、本居宣長の手枕、傳世尊寺伊行の山路露等があるが、前者は光源氏が六條御息所に通ひ初めた頃の事を描いたもの、後者は夢浮橋の後の成行を想像して書き續いだものであり、これは鎌倉時代頃に出来たもので、手枕よりずつと古い。この他源氏六十帖説に關する、雲隱・巢守・櫻人等の補卷が偽作されてゐることは既に説いた。

九 梗概

桐壺卷

桐壺帝の御寵愛深かつた桐壺更衣は人々の嫉視を受けて病没したが、忘形見の皇子は才色共に勝れて成長し、光君と稱^{なづ}へられて一世の尊仰を身に鍾められた。が、父帝の御深慮から源姓を賜つて臣下となられ、十二歳の春左大臣の姫君葵上と婚せられた。一方故更衣に生き寫しの藤壺女御が入内せられて、帝の御傷心も次第に薄らいで來た。少き源氏はこの新しい母君に亡き生母の面影を求めて懐かしい思慕を感じるのであつた。

五月雨の或夜、禁中の源氏君の宿直所に集つた頭中將・左馬頭・藤式部丞等が各種階級の女性論を始め、理想の妻女たるものの資格を論じ、指食女・木枯の女・常夏ひるなつの女・蒜食ひるの女等の面白い經驗談に夜を明かしてしまふ。所謂雨夜の品定である。

翌日源氏は方違の爲紀伊守の邸に泊り、其處で測らずその繼母空蟬（紀伊守の父伊豫介の後妻）に會つた。

空蟬卷

それから度々源氏は方違をかこつに或は態々も紀伊守の邸を訪れた。或日空蟬とその繼娘軒端萩とが碁を打つてゐる姿を隙見して興を覺えたその夜更け、源氏は女の脱ぎすてた蛻もぬけの薄衣を手にと、空しくその夜も恨めしい心で二條院の自邸に歸つた。

夕顔卷

五條邊の夕顔の花咲く宿に見出した可憐な女を伴つて、源氏が或荒院に泊つた夜、女は夢幻に現れた物怪の女——源氏の愛人六條御息所の生靈らしい——に取殺されてしまつた。後侍女から彼女は前に頭中將の愛人で兩人の間に出來た姫がある事を聞いたが、その行方は分らなかつた。

若葉卷

病氣加持がてら北山に逍遙した源氏は、麓の庵室に偶然藤壺女御にそっくり可愛い幼女を見出し、理想の妻に育て上げたい希望に驅られて、後やがて邸に引取ることになった。似てゐるも道理女御の姪に當られる方だった。これが後の紫上である。

末摘花 卷

父常陸宮に死別し、琴を友に獨り淋しい月日を過してゐる末摘花の姫君に通ひ初めた源氏は、或雪の朝普賢菩薩の乗物と見紛ふ姫の異様な容貌を見て仰天したが、哀れな姫の身の上を益と同情する心持になるのだった。

紅葉賀 卷

秋十月朱雀院へ行幸があつて、紅葉賀の宴に源氏の舞ふ青海波は輝くばかりの美しさであつた。二條院の若草の姫はいよゝ美しく成長して、源氏は益々可愛くてならない。この頃源内侍といふ色好みの老女を中に頭中將と鞘當の滑稽談もあつた。

花宴 卷

陽ものどかな二月の終、南殿で櫻の宴が催された。賑やかな管絃の遊びが夜と共に静まつて、微醺を帯びた源氏が弘徽殿の細殿でふと出會つた華やいだ若い女は、日頃源氏を憎む弘徽殿女御